

西南学院大学博物館 2008年秋季特別展

ポータル
境界は出会いの場

非西欧圏のキリスト教文化

西南学院大学博物館新収蔵品展



西南学院大学博物館
SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM
www.seinan-gu.ac.jp/museum/

西南学院大学博物館 2008年秋季特別展

ポスター
境界は出会いの場

非西欧圏のキリスト教文化

西南学院大学博物館新収蔵品展



2008年 10月27日(月) ▼ 12月13日(土)

〔主催〕西南学院大学博物館

ご挨拶

2006年5月に開館した当館も開館3年目になりました。小規模ではありますが、ミッション系大学の博物館として国内では珍しいキリスト教・ユダヤ教関連資料を収集・展示しています。その方針に従って、当館では少しずつ新しい資料も集めています。それら新集のキリスト教関連資料は、キリスト教文化やキリスト教美術の中心地として捉えられる西欧由来のものではなく、日本を含めたアジア、南米、アフリカなどの非西欧圏由来のものに主眼を置いて集めています。本特別展は、それら新集収蔵品をまとめて展示する機会といたしました。

また本特別展は、当館にとって初めての近隣館との連携事業の試みとなります。アジアの現代美術を主に扱う福岡アジア美術館が、当館と同時期にキリスト教をテーマとした展示「聖なる季節にーアジアの美術とキリスト教」展を行うため、連携した活動を目指しました。展示資料の相互貸借を行い、当館では福岡アジア美術館からお借りしたスリランカの現代作家ナリーニ・ジャヤスリヤの作品「母と子」を展示しています。カトリック信者である作者が描く「母と子」には聖母子のイメージがこめられています。他方、福岡アジア美術館では当館所蔵の「大天使ミカエル」の木彫像(サント)を展示していただいております。

さらに11月15日に行われる関連公開講演会では、福岡アジア美術館学芸員の中尾智路氏をお招きして、「フィリピンの聖なる像サント」という演題でお話いただきます。

この場をお借りいたしました、福岡アジア美術館をはじめ本特別展にご協力いただきました皆様、またご来館くださいました皆様に感謝申し上げます。

今後も定期的に新集収蔵品を展示する機会を作っていきたいと考えていますので、引き続き皆様に当館の活動にご注目いただきますようお願い申し上げます。

2008年10月27日
西南学院大学博物館館長 高倉 洋彰

ポーター 境界で出会った後は…

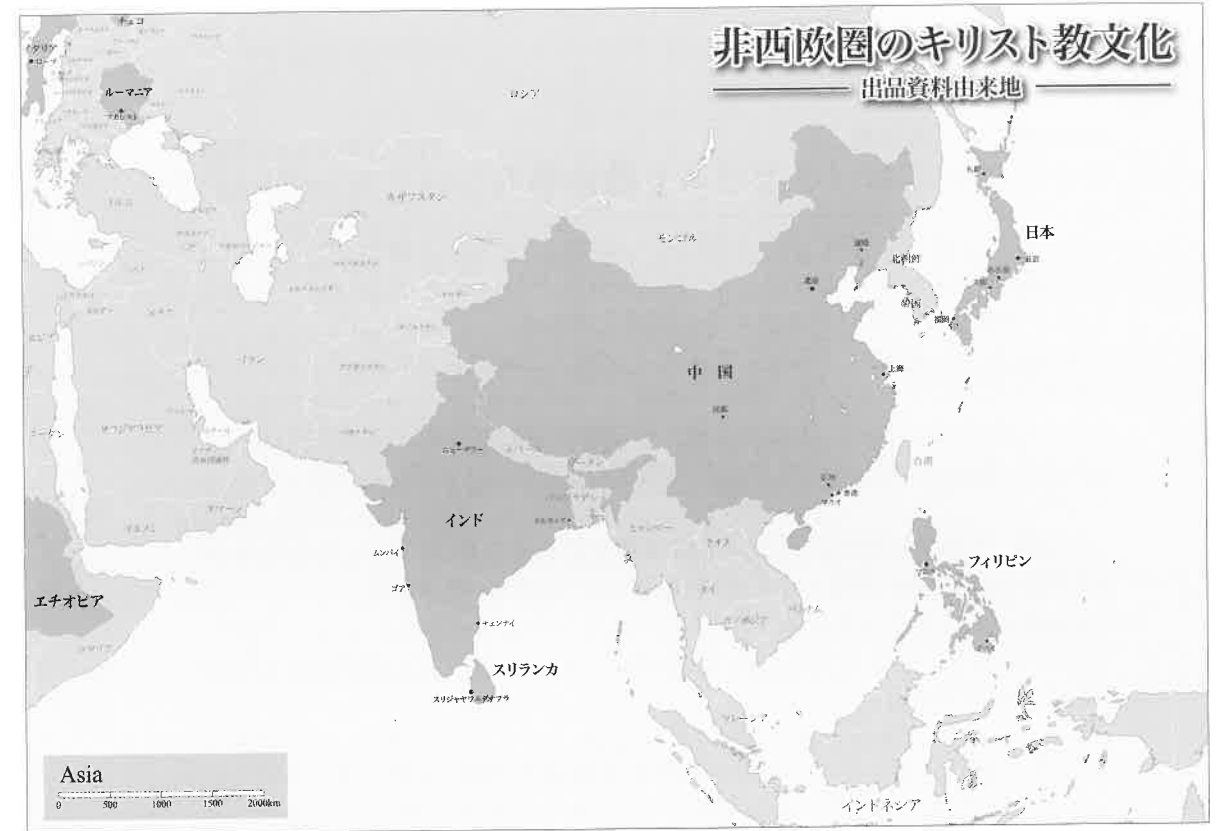
『非西欧圏のキリスト教文化～^{ポーター}境界は出会いの場～』と銘打った本展示は、地域的・時代的にも幅広い資料を展示することになりますが、「キリスト教が異なる文化や宗教に新たに出会うことになった際、その体験に対する反応はどのように造形や制度として立ち現れるのだろうか」という視点で大きく括られています。もたらず側と受ける側が出会う境界は、あるときには地理的な境目、またあるときには歴史的な境目ともなります。もたらされたキリスト教に対して、それを受ける側にはいずれの時代や場所にしても全面的・好意的な受容は決して多くなく、武力的抵抗・布教者や信者に対する迫害といった強い拒絶や、教義の変形的な理解・在来宗教との混交といった緩やかながらも元のかたちからの異化反応がしばしば起きます。それこそが繰り返されてきたさまざまな歴史のダイナミズムです。

今回は宗教美術、より明確にはキリスト教美術を多く展示しています。宗教美術というと「その信仰を持っていない人には関係ない」ものとして、あるいは「勉強しないと分からない」難解なものとして、とっつきにくいと感じる向きもあるかもしれません。しかし世界の歴史や文化、人々の考え方や諸制度など、人間世界の成り立ちを考え、より深く理解しようとする際には何かしら触れずにはいられないのが宗教です。また、ある時点で新興宗教として成立した宗教やその宗教美術は、多くの人々が時代を超えて普遍的に共感し支持することがなければ、長く継続されていくことはありません。それは、誰にとっても何かしら接点を見出す可能性を多様に持った概念や造形であることの証となるでしょう。読み解きのキーを少し抑えるだけでもだいぶ見方が変わって理解が深まりますし、見るための間口は広く開かれているのです。

目次

ご挨拶 [高倉 洋彰]	02
ボーダー境界で出会ったあとは	03
目次	04
非西欧圏のキリスト教 デマルカシオンと「異教」世界	05
非西欧圏のキリスト教 フィリピンにおけるキリスト教の導入	06
非西欧圏のキリスト教 何が・誰が表されているのか？	07
定形図像の普及と人気の連動	
非西欧圏のキリスト教 エチオピアのキリスト教概史	08
1.聖母マリア 2.聖母マリア	09
3.聖母マリア「無原罪の御宿り」	10
4.教皇 5.修道士 6.修道士	11
7.司 祭 (おそらく聖フランシスコ・ザビエル像)	12
8.三位一体	13
9.聖母子 10.救済の聖母子	14
11.農民聖イシドロ	15
12.聖母子・諸聖人・磔刑・冥府降下	16
13.マジックスクロール(護符) 14.マジックスクロール(護符)	17
15.磔刑 16.聖ペテロと聖パウロ	18
17.聖パスカリスへの奉納画	19
18.『ヴェリストラフ聖書』	20
19.アルベルト・ダ・カステッロ著『栄光なる聖母マリアのロザリオ』	21
21.景教僧文青磁壺	22
23.ナリーニ・ジャヤスリヤ作「母と子」	23
22.受胎告知・三位一体・デイシス・諸聖人など	24~25
20.島原藩『宗門御改影踏帳』	26
非西欧圏のキリスト教 寺請制度と宗門改帳	27
非西欧圏のキリスト教 マジックスクロールとは(資料13・14)	28
作品考1 景教僧文青磁壺(資料21) [高倉 洋彰]	29
作品考2 『栄光なる聖母マリアのロザリオ』(資料19) [松原 知生]	30~31
謝辞・企画編集後記 [米倉 立子]	32

*執筆者が明記されていない項は米倉立子が担当
*資料ナンバーは展覧会場における資料ナンバーに対応する



非西欧圏のキリスト教 デマルカシオンと「異教」世界

15世紀から17世紀にかけてのいわゆる大航海時代になると日本も含めた多くの非西欧キリスト教世界に対して、イエズス会を筆頭にキリスト教布教が精力的に行われた。

こうした(西欧キリスト教世界から見た)「異教」世界に対する「福音の宣布による霊魂の救済」を名目としたキリスト教の布教は、領土の獲得とその支配を進めようとする世俗権力と結びつきながら推し進められた。

当時強大だったスペインとポルトガルのカトリックを奉じる二国間で、ローマ教皇も巻き込みつつ採られた取り決めが「デマルカシオン」である。それは、異教世界を二分割して、両国がその帰属権と領有権を分け持つというものだった。大航海時代の幕開けによって、両国が発見した、あるいは将来発見するであろう領土と航海領域に対して、その航路と貿易権の独占、領土・現地住民の支配、キリスト教布教の独占などの権利をめぐる争いを避けるための(「異教」世界側の都合は全く関知しない)取り決めである。

こうした取り決めは、教皇勅書によって公認されることで、その「正当性」を合法的に裏づけられることが求められ、両国の駆け引きの末、1494年に両国間で締結されたトルデシーラス条約によって、一応の解決が図られた。この条約では、西アフリカのセネガル沖にあるベルデ岬諸島の西、370レグア(1770km)の海上において、子午線(西経46度37分)

を基準に、そこから東側をポルトガル領、西側をスペイン領とすることが定められた。文字通り、この条約で世界は二分割され、既発見地のみならず未発見地も含めて、潜在的にスペインとポルトガル両国の領有の対象となったのだ。これが、スペインとポルトガルのどちらがキリスト教を布教するか、植民地の宗主国となるかを左右する基本的な根拠となった。

こうした両国の海外版図拡大の動きには、イベリア半島のレコンキスタ・大航海時代・対抗宗教改革といったキーワードで表される歴史的背景がある。レコンキスタとは、スペイン語やポルトガル語で再征服を意味し、キリスト教国がイベリア半島からイスラム勢力を駆逐するために行った再征服活動の総称である。8世紀に始まったレコンキスタは1492年のグラナダ陥落で完了したが、この国土回復戦争の延長線として海外への版図の拡大は計画され、次々と新しい航路を開拓しながら西欧キリスト教世界にとっての未知の世界を発見した大航海時代が展開する。また、プロテスタントによる宗教改革に対抗するために、カトリック側も新たな布教先を開拓し、信者を増やす対抗宗教改革が勢いを増す時代であった。教皇庁が単独で新たな広大な「異教」の地に布教するのは難しかったので、スペインやポルトガルの「新発見」地に対する布教熱を利用してカトリックの教勢の拡大と伸張を図るという教俗一体となった動きが、日本をはじめとするアジアや南米にまで大きな影響を与えたのである。

非西欧圏のキリスト教

フィリピンにおけるキリスト教の導入

フィリピンは、アジアにおける唯一のいわゆる「キリスト教国」で、人口の90%以上がクリスチャンである。そのうち80%以上がローマ・カトリックの信者で、残り10%ほどがプロテスタントの信者とされる。

そのキリスト教史は、1521年にスペイン国王に派遣されたマゼランが初めての西洋人としてフィリピン諸島に到着し、ローマ・カトリックのミサを行ったことに始まる。しかし、キリスト教への改宗やスペインによる征服の意図が分かると、現地の首長ラブラブたちの抵抗によって、マゼランは殺害されてしまった。

その後、本格的な植民とキリスト教布教が始まるのは、ミゲル・ロベス・レガスピ率いる遠征隊が到着した1565年以降である。彼は、初代総督として、フィリピンにおけるスペイン支配の足場を固めた。ちなみにフィリピンという国名は、1542年にスペイン皇太子フェリペ2世の名から、フィリピナス諸島と名づけられたことに由来する。

布教と植民地化は同時並行で推し進められ、スペイン王が許可した各修道会は、不要な競争を避けるため各会が担当する地域を分割して精力的に布教を行った。修道士たちは、教育や文化事業にも少なからぬ役割を果たした。全教区に小学校が設立され、神学校や大学も創設され、アジア最古の大学といわれるセント・トマス大学は1611年開学である。しかし、高等教育はもっぱらスペイン人子弟にしか門戸が開かれておらず、小学校教育も植民統治に従順な住民にするためのもので、フィリピン人が批判的になることを恐れてスペイン語を教えることもなかった。しかし、教会・病院などの建築、橋・道路の建設、農産業などにおいて修道士たちは西洋文化・科学技術の導入者でもあった。

もちろん、フィリピンにもキリスト教到来以前から自然霊や祖霊などの存在に対する信仰があり、死後世界・葬礼を司る祭司などからなる在来の宗教システムが強い影響力を持っており、外来の宗教システムはその元の形のままフィリピンに受け入れられたわけではない。宗教的要素は、フィリピン人の文化の論理や感受性に基づいて選択され、変容しながら受け入れられていったのである。キリスト教を布教する側も在来の宗教的感覚の基本にある恐怖心や宗教祭礼を接点として利用した。宗教画においては、恐怖心に訴えるような地獄の描写を多用し、在来の祭や儀式の要素をキリスト教の儀礼に積極的に取り込むことも行われた。また、フィリピン人の家族や部族の深い結合関係が、社会的プレッシャーとして急速で広範なキリスト教への改宗に役立ったとされ、子供の誕生や堅信、結婚といった儀式の際に必要なとされる代父母(コンパドラスゴ)は、在来の親族組織を基に制度化された。

このようにフィリピンの受容態勢に合わせつつもスペインを通じてローマ・カトリックは、1898年の米西戦争でスペインがアメリカに敗れるまで、非常に大きな影響を与え続けたのである。

非西欧圏のキリスト教

何が・誰が表されているのか？

キリスト教美術では、様々な場面やイエス・キリストや聖母マリア、天使、聖人などの聖なる存在が表される。ストーリーを知る人が川に大きな桃が流れている図を見れば、『桃太郎』の一場面であるのがすぐ分かるように、表されているのがどのような場面や存在なのか、見る人が分かるようにさまざまな手がかりが示されている。

聖人の名前や表された場面が文字によって明記される例も多いが、それ以外にも表されている対象を特定するのに大きな役割を担うのがアトリビュート(持物)である。

アトリビュートとは、ある人物が身につけたり、手に持ったり、踏みつけたり、あるいはその人物との関連で何らかの情景を構成したりする視覚的要素で、その人物の素性や特性を明らかにする。ときにその人物を象徴する道具や動植物、衣服や身体的特徴などもアトリビュートとして機能する。それらのアトリビュートたるモチーフは、聖書や聖人伝、受難伝、奇跡譚などが典拠になり、そのストーリーを知る人はモチーフと関連付けて主題を同定することが出来るのである。

キリスト教美術では、「降誕」や「磔刑」などの叙事的な一場面を表すだけでなく、「三位一体」や「神の母たる聖母マリア(テオトコス)」など神学的に難解な概念も含む教義、そして人々を救済し、自身への残酷な拷問を超越するなど聖なる存在の奇跡的な力を視覚的に表すための図像のパターンがある。また、キリストやマリアなどが持つ多様な属性のうちどの部分に焦点を当てているか、表されたモチーフの組み合わせによってどのような意味の広がりか示されているのかなどに注意することで、それぞれの図像に込められたより複雑で個別的な意味を読み解くことが可能となる。

定形図像の普及と人気の連動

フィリピンでは、キリスト教の聖像をサントと総称している。多様な素材がありうるが、より狭義には象牙製や木製などの彫像を指す。人々の崇敬を集める聖なる存在は数多く、またキリストや聖母マリアのように多様な属性を表すため、多様な図像の定型表現を持つ存在もある。

キリストでいえば、「眠る幼子イエス」・「幼子イエス」・「世界の救世主」・「神聖なる羊飼」・「キリストの洗礼」・「キリストの受難」・「埋葬」などの属性や場面がしばしば表される。また、聖母マリアの場合は、「聖母子」・「ロザリオの聖母」・「無原罪の御宿り」・「悲しみの聖母」・「聖母被昇天」・「ガルメル山の聖母」などが人気の高い主題である。

他にも多くの聖人や天使などが崇敬を集めるが、当時の宗主国スペインにおいて崇敬を集めた聖人の定型図像がフィリピンでも広く受け入れられている。また、フィリピンで布教活動を進めた各修道会に関わる聖人たち、そして子供や健康、各職業の守護など、現世的な悩みや問題に力を添えてくれるとされる聖人たちの人気が高い。

非西欧圏のキリスト教 エチオピアのキリスト教概史

アフリカ大陸の北東部に位置するエチオピアにおけるキリスト教史は、早くも4世紀のエザナ王の時代、遭難して王の奴隷となったフェニキアのフルメンティオスと弟アイデシオスがキリスト教を伝えたのが始まりとされている。以来、エチオピアの宮廷はエチオピア正教といわれるキリスト教を信奉するようになる。

5世紀末には、「九聖人」と称される、シリア・パレスティナ方面からやってきた単性論を信奉する学識豊かな聖職者達が、451年のカルケドン公会議の抗争を避けて到来した*。彼らは、修道院を創設し、聖書を古語ゲーズ語に翻訳したとされる。

12世紀には、敬虔な信仰心と奇跡で聖人とみなされるザグウェ朝(1137頃-1270頃)のラリベラ王が、後に同名のラリベラと称されることになるロハの地に「新たなるエルサレム」として、現在世界遺産にも指定されている岩窟教会群を建造する。

13世紀末には、ソロモン朝(1270頃-1527頃)の成立に大きな役割を果たし、後に列聖される修道士テクラ・ハイマノットがデブラ・リパノス修道院を創設し、修道院制度の確立と信仰の普及に力を注いだ。イスラム勢力との争いが断続的に続く中、宮廷と修道院・教会の関係は強化されていく。14世紀末から15世紀初頭にはヨーロッパとの接触も始まる。

火器が本格的に使われ始めた16世紀になると、「左利きのグラン」と呼ばれた知将が率いるイスラム軍の侵入が激しくなり、対イスラム勢のためにポルトガルとの同盟が試みられた。これは当時、東方のどこかにキリスト教王国があり、その王としてプレステ・ジョアンという人物がいるという、ヨーロッパに流布していた伝説とエチオピアとを結びつける考えに基づいたキリスト教同盟であった。これを契機にポルトガルのイエズス会がエチオピアにも宣教に来るが、ローマ・カトリックへの改宗を迫るイエズス会側とエチオピアの伝統的なキリスト教信仰を支持する側との間で対立が深まる。

17世紀、ゴンダール朝(1632-1855)のファシラダス王は、エチオピア正教を保持し、イエズス会士を放逐の上、ヨーロッパとの関係を断絶した。政治的には停滞の時代だが、文化面では著しい発展を遂げた時代である。以来、ムソリーニ政権期のイタリアに短期間統治を受けたほかは、エチオピアは独立を保ち続けたアフリカでも数少ない地域である。

現在は、イスラム教徒や、カトリックやプロテスタントのキリスト教徒人口も増えているが、とくにエチオピア北部ではいまだエチオピア正教が多数派である。

*単性説:カルケドン公会議で正当な教理とされた、キリストの唯一の位格(ペルソナ)において神性と人性を認める「両性説」と異なり、単性説は人性を認めず、キリストの受肉後には唯一の本性たる神性のみが存在すると主張する説。単性説にたつ東方諸教会として、シリアのヤコブ派教会、エジプトのコプト教会、エチオピア正教会、アルメニア正教会などがある。



1. 聖母マリア

像：高さ36.5cm×奥行10.4cm×幅17.6cm
台：高さ2.8cm×奥行10.1cm×幅16.5cm
フィリピン 19世紀 木製

聖母マリアは、被昇天(自らの力ではなく、神の力の下で天に昇ること)後、天上において冠を授かる。天の元后として冠をかぶった姿のマリア像は、フィリピンの素朴なサント(キリスト教の聖像)でも好まれる主題である。



2. 聖母マリア

像：高さ28cm×奥行8.4cm×幅13.8cm
台：高さ3.3cm×奥行6.9cm×幅12.5cm
フィリピン 19世紀 木製



3. 聖母マリア「無原罪の御宿り」

高さ27.5cm×奥行8cm×幅9cm
フィリピン 18世紀 木製

「無原罪の御宿り」とは、神の母たるマリアの聖性を表す属性のひとつで、マリアは原罪なくして母アンナの胎内に宿ったとする考えで、長らく論争の対象だったが、カトリックの教義として1854年に正式に認められた。フィリピンの当時の宗主国スペインでは、カトリックによる対抗宗教改革が盛り上がったバロック期に好まれた主題である。この主題では、聖母マリアは多くの場合、雲に浮かぶ天使たちに支えられ、三日月の上に立つ姿で表される。



4. 教皇

高さ39.7cm×奥行13.2cm×幅13.6cm
フィリピン 19世紀 木製

頭に重たそうな三重の冠、つまり教皇冠をかぶっていることから、この人物が教皇であることが分かる。横や背後から見るとかなり猫背で、正面観を重視した素朴な作りである。



6. 修道士

高さ23.7cm×奥行6.8cm×幅9.5cm
フィリピン 19世紀 木製 頭部は骨製



5. 修道士

像：高さ17.4cm×奥行5.1cm×幅12.6cm
台：高さ3cm×奥行9cm×幅15cm
フィリピン 19世紀 木製

フィリピンのサント(キリスト教の聖像)においてこのような若い修道士の姿で表される人物には、フランシスコ会修道士であったパドヴァの聖アントニウスの例が多いが、彼を表す際には片手に幼子イエスを抱き、もう一方の手にはユリの花を持つなどののが典型。

ここでは、別材で作られていた両手の欠損により、本来の姿が不明なため人物同定が困難である。



7. 司 祭(おそらく聖フランシスコ・ザビエル像)

高さ20.5cm×奥行7cm×幅8.5cm
インド、ゴア 18世紀/19世紀 木製

インド南部のケララ州の教会伝承によれば、キリスト教は使徒トマスによって早くも紀元52年にもたらされ、彼は72年マドラス郊外にて殉教したとされる。史実性には問題があるが、200年頃までにはインド南部にキリスト教会が定着していたと考えられている。インドで最も古い伝統を持つシリア正教会と対立する形で、16世紀、ポルトガルは香辛料交易を独占するためインドの植民地政策をローマ・カトリック教会の世界戦略と歩を揃えながら進める。1533年にはゴア司教区が設立され、同地には1542年、イエズス会士フランシスコ・ザビエルが到着した。18世紀になるとイギリスをはじめ、プロテスタントの諸教会がインド伝道を開始した。

この作品は、頭頂部に穴があり、ニンプス(頭光)を表す部材が欠損した跡かもしれない。その場合、本来聖人を表そうとしたものであり、スータンと言われる修道士の日常服の上に白衣のアルバを着て、先端に十字架模様がついたストラを首の周りに巻き、ひげを生やした姿は、典型的なザビエル像に当てはまり、視線を傾けている握った左手の先には十字架を持っていた可能性もある。

日本への布教後ザビエルは中国布教を目指し、本土上陸前に上川島で1552年12月に亡くなったが、彼の遺体はその後ゴアのボム・イエズス教会に送られて現在も安置されており、ゴアの守護聖人として非常な崇敬を集めている。



8. 三位一体

縦45.5cm×横35cm×厚さ1.8cm
フィリピン 19世紀 木製

三位一体とはキリスト教神学の根幹をなす教義で、父なる神と子なるキリストと聖霊が皆等しく尊く、それら3つの位格(ペルソナ)が1つの実体・本質として完全に一致・交流することを意味する。17世紀、スペインの支配下にあったフィリピンやラテンアメリカで見られる「三位一体」の図像では、本作品のように同一の姿の3人の男性像で表されることが多く、中央に父なる神、左右に子なるキリストと聖霊が表される。

ここでは、神が支配する全世界を意味する球体の上に、向かって左からキリスト、神、聖霊が雲の中に並んでいる。同一の赤い衣をまとい、右手で祝福のポーズを示す三者は、キリストは手足に描かれた磔刑を表す釘痕の傷と彼の象徴である犠牲の子羊によって、神は顔の描かれた太陽と左手に握る杓杖によって、聖霊はその象徴である白い鳩によって見分けられる。



9. 聖母子

縦39.5cm×横21.5cm×厚さ1.6cm
フィリピン 19世紀 木製

冠をかぶった聖母は右手に蠟燭を持ち、左手で幼子イエスを抱く。イエスは神が支配する全世界を意味する球体を手にしている。暗い背景に蠟燭をもって照らす聖母子が、闇の中の人類に救いの光をもたらし、導くことを表している。



10. 救済の聖母子

縦31cm×横24.5cm×厚さ1.2cm
フィリピン 19世紀 木製

中央に幼子イエスを抱いた聖母が立ち、右手で炎に半身をのまれた男性の手を引いて救い出している。その聖母に2人の天使が冠を授けようとしている。さらに右下でもう一人の天使が聖母に捧げものを差し出している。この図の下には「救済の聖母」と記されており、顔の描かれた炎に象徴される煉獄にとらわれた信徒の魂を聖母が救済するという図像だとわかる。煉獄とは小罪のある、または罪の償いを果たさなかった靈魂が、天国に入る前に現世で犯した罪に応じた罰を受け、清められる場所とされる。生者はミサや祈りによって煉獄の魂の苦しみを和らげたり短くしたりすることが出来る。そこで、煉獄で苦しむ死者の魂を救うため、そして将来の死後の自分の魂を救ってもらうため、聖母にとりなしてもらえるように人々は自分が生きている間にできるだけ多く祈る努力を重ねるのである。

本資料は「カルメル山の聖母」という、フィリピンには17世紀初めにもたらされた図像主題に基づいたヴァリエーションと考えられ、敬虔な信徒は煉獄の炎から聖母によって速やかに助けられることを表している。聖母子はカルメル山、あるいはその山頂上の雲の上に立っており、炎の中の男性が首に巻いている緑色のマフラーのようなものは、スカブラリオといわれるもので、信心のために紐でつなぎ、肩から胸と背中にぶら下げる、聖画像を織り込んだ布である。



11. 農民聖イシドロ

縦35.2cm×横37cm(扉開き時)・21.5cm(扉閉じ時)×厚さ2.5cm
フィリピン 19世紀 木製

敬虔な信徒であったイシドロ(1070頃-1130)はスペインのマドリッド近郊で貧しい小作農として生まれ、畑仕事前の朝の礼拝を欠かすことがなかった。ある時、イシドロが朝の礼拝のためにしばしば仕事に遅れてくると仲間の小作農が地主に告げ口をした。地主が調べるとイシドロが祈る間、天使が彼に代わって牛に鋤を引かせ、畑仕事を何倍もの速さで進めている奇跡を目撃した。他にもイシドロは乾いた地面に杖を突いて水を湧かせるなどさまざまな奇跡を起こしたため、農民とマドリッドの守護聖人とみなされ、フィリピンでも広く崇敬を集める聖人となった。

ここでは中央に地面を杖でついて水を湧かせるイシドロと背後に牛に鋤を引かせる天使が描かれ、聖人の横には立膝で手を合わせる寄進者像が横向きで描かれている。





12. 聖母子・諸聖人・磔刑・冥府降下

中央パネル：縦35.7cm×横26.6cm×厚さ3.9cm
 左パネル：縦32cm×横11.4cm×厚さ1.2cm
 右パネル：縦32.5cm×横11.8cm×厚さ1.4cm
 左右パネルを閉めた際の厚さ4.8cm
 エチオピア 19世紀/20世紀 木製 織布(キャンバス)

中央パネルには、母乳を飲む幼子イエスと彼を抱く聖母マリアが大きく描かれ、上部には顔に翼の生えた天使セラフィムが飛んでいる。右下に描かれるのは、聖母子を拝む寄進者の姿である。右パネル上部には「キリストの磔刑」が描かれ、処刑に関わる2人のローマ兵の下には聖母と福音書記者ヨハネが悲しみのポーズで描かれる。上方では、十字架に釘で打たれたキリストの手から流れる聖血を両側から天使が聖杯で受け止めている。右パネル下部には、エチオピアではキリストの復活を意味する図像の「冥府降下」が描かれる。暗い冥府で救世主の到来を待ち受けていたアダムとエヴァをはじめとして、旧約時代の義人たちをキリストは連れ出し天上へと導く場面であるが、ここでは死に対する勝利を表す旗を手にしたキリストの足元に裸体のアダムとエヴァが描かれている。上部の「磔刑」場面における肉体の死に対して、キリストが打ち勝ったことを下部の「冥府降下」場面で示す組み合わせとなっている。左パネル上部には「竜を打ち負かす白馬に乗った聖ゲオルギオス」が描かれる。ゲオルギオスはエチオピアの守護聖人でもあり、単独で描かれることもしばしばあるが、信徒への絶対的な庇護者として聖母子との組み合わせで描かれることも多い。下部には「砂漠の聖ゲブラ・マンファス・ケッドゥス」が両手を差し上げた祈りのポーズで描かれる。皮衣を着たこの聖人は、砂漠で孤独な隠修生活を続け、ライオンやヒョウといった肉食獣に平和を説き、渴きで飛べなくなった鳥に自らの目の涙を分け与えたというエピソードで知られる。エチオピアのキリスト教美術では、このように砂漠で厳しい隠修を行った修道士たちが聖人として崇敬を集め、しばしば描かれるのが特色である。



13. マジックスクロール(護符)

縦約203cm×横約11cm
 エチオピア 19世紀/20世紀 羊皮紙

本資料には、3箇所の図像が描かれている。冒頭に剣を持った守護天使が、悪魔や邪悪な精霊に立ちふさがるように立ち姿で描かれる。中央には、詳細が不明だが、中央に杖と聖水の入った瓶をもつ、ニンブス(頭光)をつけた聖人が立ち、その両側にコルネット状のものに体を包まれ、胸から上だけを外に出した2人の人物が中央の聖人を称えるような仕草をしている。マジックスクロールが新たに製作される際にはそれ以前の例を手本として写すということが行われるが、描き写しが繰り返されていった結果、本来の図像主題にふさわしい表現から徐々に離れてしまっていたことが推測される。末尾には、格子状に区分けされた中に顔や十字(クロス)のヴァリエーションも含めた幾何学模様が描かれる。



14. マジックスクロール(護符)

縦約130cm×横約8.5cm
 エチオピア 19世紀/20世紀 羊皮紙

本資料には、冒頭と中央に2箇所、計3箇所に図像が描かれる。冒頭には顔に翼を生やした天使セラフィムが上下に3人並び、下には「ソロモンの結び目」と呼ばれる組み紐や十字(クロス)のヴァリエーションの幾何学模様が表されている。天使は、アフロヘアに大きく見開かれた目が特徴的で、ゴンドール様式と呼ばれる伝統的な図像型を引き継いでいる。中央の上部は幾何学模様、下部には格子状の区画の中央に顔がひとつ描かれている。これは「閉じ込められた悪魔」と読み解くことも可能かもしれない。



15. 磔 刑

縦16.7cm×横10cm
エチオピア 19世紀 羊皮紙

磔刑のキリストを中央に、向かって左に聖母マリア、右に福音書記者ヨハネが立っている。

本資料は、本来聖書あるいは祈祷書の挿絵だった部位を切り抜いた断簡である。



16. 聖ペテロと聖パウロ

縦17cm×横10.6cm
エチオピア 19世紀 羊皮紙

使徒の代表格であるペテロとパウロは、早くも4世紀には描き方の典型が確立したが、ここでもそれを踏襲している。向かって左の白髪で白いひげの人物がペテロ、ひげや髪は黒いが頭頂部が禿げているのがパウロである。

本資料は、本来15の磔刑図と同じ聖書あるいは祈祷書に収められていた別葉の挿絵を切り抜いた断簡である。



17. 聖パスカリスへの奉納画

縦28.4cm×横19.5cm
メキシコ 1927年 ブリキ

パスカリス(1540-1592)は、聖霊降臨祭の日曜日にスペインの小村に生まれた。その日はスペイン語で「聖霊のパスカ(復活祭)」と呼ばれることに由来する名である。両親は貧しい農民だったが非常に信仰篤く、パスカリスも羊飼いとして幼い頃から働き、清貧に徹し、日々の祈りを欠かさない信仰に篤い若者に育った。彼は羊を放牧中に何度も光り輝く聖体(キリストの肉を表すパン)を戴いた聖杯(キリストの血を表す葡萄酒の象徴)のヴィジョンを目にする奇跡を体験し、やがてフランシスコ修道会に入会した。彼は夜も含めて長時間を聖体顕示台の前で過ごし、後に聖餐式の聖人とみなされた。貧者のためにひとかけらのパンを増やし全員を満たしたり、病人を治癒したりなどの奇跡を起こした。彼は料理と台所の守護聖人ともされている。

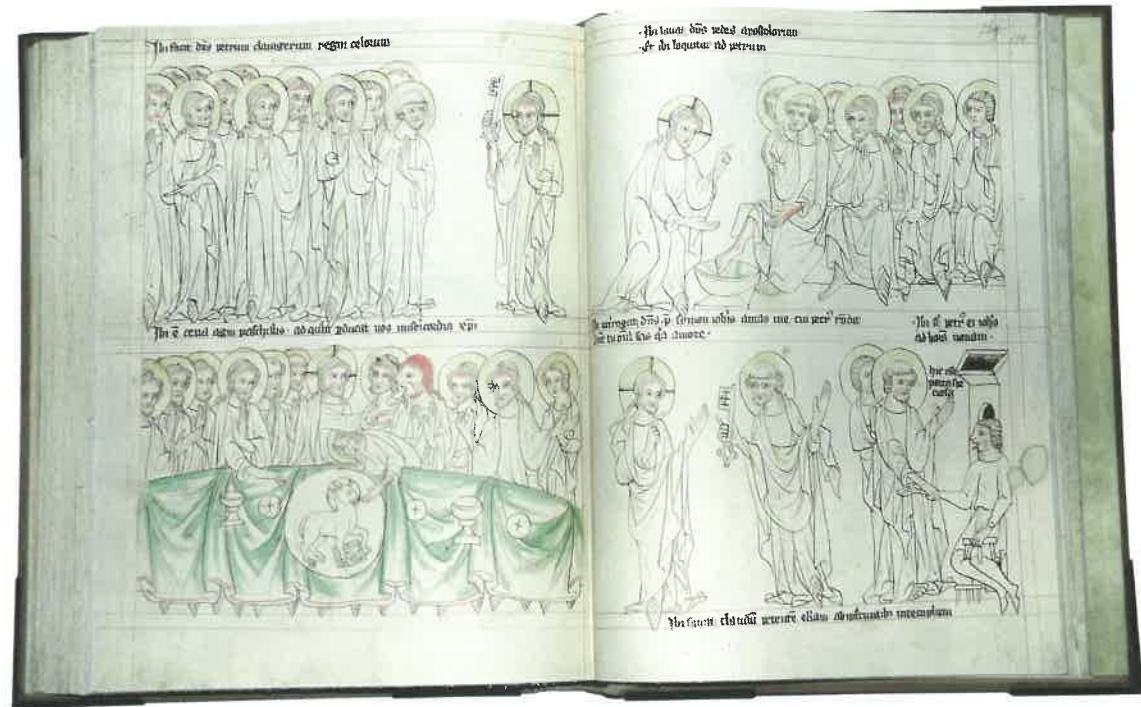
新興のプロテスタントに対抗し、ローマ・カトリックが秘蹟や教会、修道会の意義や重要性を再確認する時期にあった当時、彼の存在はカトリックにとって理想的・模範的信徒の姿であり、1618年に彼は福者として認められ、1690年には聖人として列聖された。スペインの支配下にあったラテンアメリカでも崇敬を集める聖人である。

ここでは、台所のかまどの上に修道服を着てエプロンをつけた聖人が雲に乗って浮かんでおり、聖体顕示台を示している。下では寄進者の夫妻がひざまずいて聖人に祈っている。

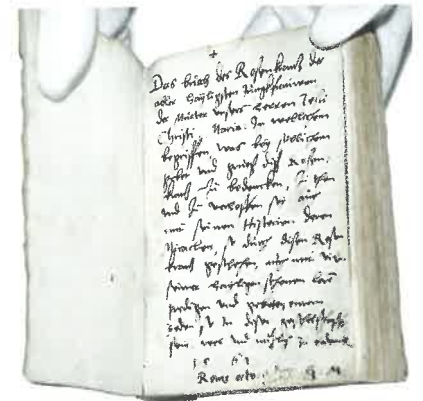
【奉献文和訳大意】

敬虔なる婦人とその夫がこの祈祷画を聖パスカリスに奉納いたします。なぜなら聖人様のお陰で子宝に恵まれ、また、労働者として収入を得ることができるようになったからです。

ロス・アンヘレスの町にて 1927年



①



②



③



④



⑤



⑥

18. 『ヴェリスラフ聖書』

Velislai biblia picta

チェコ(複製)オリジナルはチェコ共和国 国立図書館所蔵 14世紀前半

各頁:縦30.7cm×横24.5cm

188フォリオ 挿図747点 紙(オリジナルは羊皮紙)

この聖書は14世紀前半、ルクセンブルク朝のボヘミア王ヨハンとその息子の神聖ローマ帝国皇帝カール4世(在1346-1378)の時代の宮廷公証人兼高級司祭のヴェリスラフ(1367没)の命により作成されたもので、全編が図像によって表され、その数747図にのぼる。各葉が上下2段に分けられ、各欄上部に罫線が引いてあり、そこにテキストが書かれ(後半部はテキストが書かれていない)、それに対応する図像が下部に展開する。旧約の創世記や新約のヨハネの黙示録などが生き生きと描かれ、福音書や使徒伝のほか、チェコの守護聖人ウェンセスラス王伝が描かれているのが特徴的である。

19. アルベルト・ダ・カステッロ著、『栄光なる聖母マリアのロザリオ』

Rosario della gloriosa Vergine Maria

イタリア、ヴェネツィア 1556年(初版1521年)

縦15cm×横10.5cm×厚さ4cm ヴェラム(子牛皮)

イタリア語で書かれた最古のロザリオ祈祷書(初版は1521年)。著者はヴェネツィアのサンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ修道院で活動したドメニコ会修士。15世紀末以降のイタリアにおけるロザリオ信心の普及を背景に、一般信徒の私的な礼拝のために執筆された本書は、当時大人気を博し、16世紀だけでも15刷を重ねた。本書の特徴をなすのは、聖母マリアの生涯やイエスの受難の諸場面を描いた美しい木版画の数々で、これらはロザリオ祈祷における視覚的な瞑想の重要性を物語っている。



21. 景教僧文青磁壺

高さ18.5cm×直径11.8cm(外縁口径7.8cm)
中国 元代(13世紀) 青磁

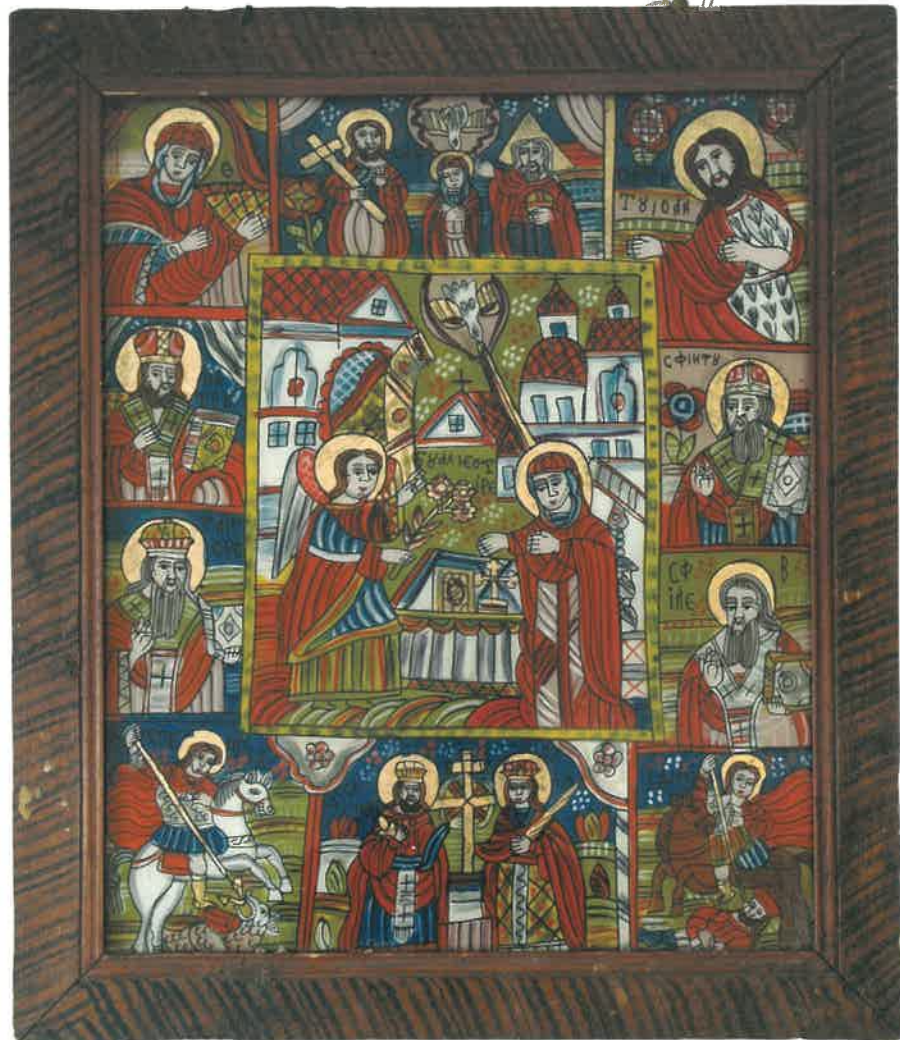
中国浙江省の越州窯の作。4面に聖職者像がメダリオン技法で貼り付けられている。景教(ネストリウス派キリスト教)関係の図像は、河北省房山の「十字景教石刻」や2006年河南省洛陽出土の「大秦景教宣元至本経幢」などで知られているが、聖職者の像はこれまでにない。西域人の特徴を備えた人物が修道衣を着ているが、腰を結ぶ紐が前に垂れ下がっている点がフランチェスコ会の僧服に通じるとともに、唐代の845年に弾圧を受け衰退した景教が元代に再興していることを考えれば、13世紀の越州窯末期の作とみられる。



23. ナリーニ・ジャヤスリヤ作「母と子」

縦56.2cm×横37.6cm
スリランカ 福岡アジア美術館所蔵 1977年
油性塗料・画布

スリランカ、マタラ生まれの画家。インドのカルカッタに住んだのち、イギリスに渡り、ロンドン美術工芸大学とコンバーウェル大学で美術を学んだ。カトリック信者である作者は、一貫してキリスト教や平和を主題とした作品を描いてきた。絵画作品だけではなく、絵本の挿絵や教会の壁画、ステンドグラスなども手がけ、またアジアにおける宗教美術の研究も行っている。丸みをおびた形、柔らかな筆致は、作者の作風をよく伝える。日本のキリスト教系大学での講演や個展など、日本のクリスチャンとも関係の深い作家である。本作では、両手に摘んだ花を手にする母と彼女に背負われた子が暖かい色彩で描かれる。子は、かごの中にすっぽりと納まっている、あるいは布にくるまれているような形で母とよく似た面立ちの顔だけを出しており、その持ち紐を母は頭に引っ掛けて背負っている。母が子を抱くといういわゆる西洋絵画で確立した聖母子図とはまったく異なる構図であるが、向かい合わずとも母子の間に流れる平穏で慈愛に満ちた空気が伝わってくる図である。



22. 受胎告知・三位一体・デイシス・諸聖人など

縦71.3cm×横61.9cm×厚さ3cm(額含む)
ルーマニア 19世紀/20世紀 ガラスに着彩

ルーマニアのガラスアイコンは、農民が冬の農閑期に描くような民芸的な要素が強いが、この描かれた人物の目や手の表現が特徴的な無名画家は、本資料のほかにも作例を残しており、比較的手がよく、複雑な構図もこなす。キリスト教の知識や教養を備えた職業画家といえよう。記されている文字は、教会スラブ語を表す古い形のキリル文字であり、「聖なる」という意味を示す略記文字[C]も織り交ぜられている。本資料では、大天使ガブリエルが処女マリアに聖霊が下り、神の子を懐胎したことを告げる「受胎告知」を中心に表に図示したような主題や人物が描かれている。上段左右には聖母と洗礼者ヨハネの組み合わせによって構成される「デイシス」の構図が、上段中央の「三位一体と聖母」の場面を挟んでいる。「デイシス」とは、ビザンティン美術においてキリストを中心に据え、向かって左に聖母、右にヨハネを配する図像の型を称する用語で、聖母はキリストの母、ヨハネはキリストの先駆者として、終末に際して人類の救済をキリストにとりなすとされる。聖母とヨハネは両手を胸に挙げて嘆願のポーズを採る。東方の正教美術の最重要な図像のひとつであり、さまざまなヴァリエーションがある。ここでは、三位一体として表される神に対して聖母とヨハネが嘆願するという構図である。

中央の外側左右には4名の正教会の祭服を身につけ、手に聖書を携えた人物が描かれる。おそらく全キリスト教会レベルではなく、地域性の強い聖人たちだと考えられる。左上の人物は、その銘から「ペテロ(=現地名ペトル)」と読み、右下の人物は「ウェセックス王イネ」であると判明する。前者のペトルは、主教聖ペトル・モヴィラ(生1596-没1647)のことであり、彼はキエフおよび全ロシア府主教であった。後者の王イネ(在688-726)は、領土拡張など権力者として成功を取めたが、戦いに疲れて最晩年は自ら退位し、妻とともにローマへ赴いて修道生活を送り、イギリス人巡礼者の救貧施設などを作ったとされる。王と銘がありながらも、退位後の生き方が聖人たるゆえの彼は、王冠をかぶらない姿で描かれている。他の2名は人物同定が難しい。さて、ここにローマ・カトリックの聖人であるウェセックス王イネがなぜ登場するのだろうか？ルーマニアの中央北部にトランシルヴァニアという地方があり、この地域には12世紀頃からいわゆるドイツ人、特にザクセン系の人々が移住して、文化的にも宗教的にも比較的独自性を保っていた。このザクセン系移民はアングロ・サクソンで、王イネとはもともと同じ出自の民族集団である。ウェセックスWessexは、本来「西サクソン」West Saxonsという意味の古英語に由来するもので、トランシルヴァニアのザクセン系の人々には、自分たちと民族的アイデンティティーを共有する近い存在だったと思われる。よって、本資料はトランシルヴァニアの伝統を受けているのではないかと推測される。本資料はさまざまな出自を持つ民族が混在する地域や時代に制作されたことを背景に、ルーマニア正教の伝統に基づきつつ、ローマ・カトリック側の権威を取り入れ、双方の支持を得ようとして正教とローマ・カトリックの中間的な表現を選択したと思われる。

下段左右には、「竜を倒す聖ゲオルギオス」と「異教徒(イスラム教徒)を倒す聖ディミトリオス」という2人の正教美術で好まれる騎馬聖人が描かれる。両者とも悪を打ち破り、キリスト教を守護する戦士としての聖人であり、しばしば対で描かれる。オスマン・トルコの脅威を受け続けたルーマニアの歴史に裏付けられた聖人の選択である。下段中央には、キリスト教を最初に公認したコンスタンティヌス帝とその母ヘレナが描かれる。キリスト教の熱心な信徒であり、保護者であった母后ヘレナがパレスティナにて、キリストの磔刑に使われた十字架を発見したという「聖十字架伝」を表す図像である。

ガラスアイコン画題表		
デイシス 聖母マリア	三位一体と聖母マリア 聖霊の鳩 子なるキリスト 聖母マリア 父なる神	デイシス 洗礼者聖ヨハネ
主教 聖ペトル・モヴィラ (キエフおよび全ロシア府主教)	受胎告知 聖霊の鳩 花を手渡す (本来は白百合) 大天使ガブリエル 処女マリア	不明
不明	聖十字架伝 コンスタンティヌス帝 聖十字架 母后ヘレナ	ウェセックス王 聖イネ
竜を倒す 聖ゲオルギオス		イスラム教徒を倒す 聖ディミトリオス



①



②



③



④

〈寄合方〉天明四年	日本、島原	天明4年(1784)年	縦31cm×横22.7cm	(閉じた状態) 和紙
〈寄合方〉文化三年(一)	日本、島原	文化3年(1806)年	縦31.2cm×横22.3cm	(閉じた状態) 和紙
① 〈寄合方〉文化十三年(壹)	日本、島原	文化13年(1816)年	縦31cm×横23cm	(閉じた状態) 和紙
〈寄合方〉文化十三年(三)	日本、島原	文化13年(1816)年	縦31cm×横22.8cm	(閉じた状態) 和紙
② 〈寄合方〉天保二年(一)	日本、島原	天保2年(1831)年	縦31cm×横22.8cm	(閉じた状態) 和紙
〈寄合方〉天保二年(三)	日本、島原	天保2年(1831)年	縦31cm×横22.6cm	(閉じた状態) 和紙
〈宗門方〉天保四年(三)	日本、島原	天保4年(1833)年	縦31.3cm×横22.5cm	(閉じた状態) 和紙
〈宗門方〉文久三年(四)	日本、島原	文久3年(1863)年	縦31.8cm×横22.2cm	(閉じた状態) 和紙
③ 〈宗門方〉嘉永五年(一)	日本、島原	嘉永5年(1852)年	縦31cm×横22.7cm	(閉じた状態) 和紙
④ 〈宗門方〉嘉永五年(三)	日本、島原	嘉永5年(1852)年	縦31cm×横22.5cm	(閉じた状態) 和紙
〈宗門方〉嘉永七年(一)	日本、島原	嘉永7年(1854)年	縦31.8cm×横22.1cm	(閉じた状態) 和紙

20. 島原藩『宗門御改影踏帳』

これらは1784(天明4)年から1863(文久3)年の間に記録された11冊の島原藩の宗門改帳で、キリシタン(切死丹と表記)ではないことを誓う証文を冒頭に記した後、藩下の寺々の名前とそれらの檀家の家族が列記してあり、各寺、各人が捺印をしている。表紙等の記載から宗門改帳が正月に行われたことがわかり、檀家一戸の家族として記録された人々の続柄や人数などの構成がどのように成り立っていたのかも見て取れる興味深い資料である。

非西欧圏のキリスト教 寺請制度と宗門改帳

キリスト教が日本の神仏を誹謗して治安を乱し、海外からの侵略を誘発し、国家体制の確立・維持に大きな障害となると危険視した江戸幕府は、豊臣秀吉が1587年に発令した伴天連追放令を踏襲し、初代將軍徳川家康の時代から禁教令を全国に布告し、キリシタン信仰を明確に厳禁した。この禁教令は、明治時代に入った1873(明治6)年のキリシタン禁制の高札撤去まで続いた。

寺請制度とは、江戸時代にキリシタンではないことを寺院が証明する制度であり、檀家であることを寺院が証明した文書が寺請証文である。寺請証文の初例は1614年2月の京都の事例である。天草高浜村の庄屋を代々世襲してきた上田家に遺された古文書群、「上田家文書」に収められた、キリシタンだった者が信仰を捨てて＝「転んで」二度とキリシタン信仰を取り戻すことはないと神々に誓った「転び証文」(1633年)も寺請証文である。幕府のキリシタン弾圧策の強化に伴い寺院の檀家に対する権限も強化されていった。この寺請が全国的に確立されたのは1673年である。

寺請制度は、江戸幕府がキリシタンを摘発・検挙するために設けた制度である宗門改めとも連動している。禁教令の発令に伴いキリシタンを摘発するため、各地で宗門改めが実施された。1628年頃には長崎で踏み絵による改めが始まった。幕府による宗門改めは、島原の乱(1637年12月－1638年4月)後に本格化し、1664年には10万石以上の諸大名に専任の宗門改役人を置いて毎年宗門改めを行うことを命じ、1671年には宗門人別帳(宗門改帳)の作成が義務付けられた。その形式は一戸を単位に戸主と全家族、奉公人を性別、名前、年齢、宗旨、檀那寺とも記し、檀那寺と村役人がこれに捺印するのが基本で、戸籍原簿や租税台帳の横能も果たした。

一連の制度により幕府は人民把握・人民統制を確実にし、寺請によって仏寺と檀家の寺檀関係が確立した。

非西欧圏のキリスト教
マジックスクロール(護符)とは (資料13・14)

エチオピアにおいてマジックスクロールは、身に降りかかる危険や病気、他人からの妬みや呪いによって引き起こされる異常から身を守る護符として用いられる。いわゆるヒーリングによって、ダブタラ(ダブタラとは、歌や詩、文学を学んだ民間の司祭のような職能者で、歌手・作家・教師・医師といった多様な側面を持つ。彼らは、伝統的な薬品の扱いもする。)が病気を治す際の「薬」として価値付けられている。こうした護符はおそらく非常に古くから存在してきたと思われるが、世俗的・私的な護符として用いられてきたため数世紀も遡る現存例はなく、古くても19世紀のものである。

マジックスクロールには赤や黒のインクで身を守る機能を持つ祈祷文や呪文、シンボリックな幾何学模様、守護天使や聖人のような具象モチーフが表される。こうした特殊な文や図像は、強力な悪魔や邪悪な精霊を屈服させ、従わせる力を持つと考えられている。かつては天上の住人だけしか知らない秘密だった呪文や象徴的なモチーフが、あるとき秘密が漏れて、あるいはアブラハムやソロモンのような秀でた者を介して地上に伝えられたとされ、マジックスクロールに表される祈祷文や呪文、図像がそれにあたると考えられているのである。

マジックスクロールは「皮に書かれたもの」(アムハラ語では*yäbranna ketab*)、あるいは「(複数の)名前」(ゲーズ語では*asmat*)と呼ばれる。ティグリーニャ語を話す地域では、それらはタリスマン(護符)(*tälsäm*)、あるいは病人の背の高さと同じ長さのスクロールを使うという習慣から「フルサイズ=全身長」(ティグリーニャ語では*ma'ero qumät*)と呼ばれる。

こうしたスクロールは、犠牲の家畜(牛や羊)の皮からダブタラが製作する。皮を数日間水につけ、その後、硬い木製の枠にくくりつけて、輪状に結ぶ。天日で乾燥させて、皮を張る。次にナイフで肉の残り滓をこそげ落とし、溶岩でこする。皮を再度洗い、乾燥させ、なめす。これを繰り返して、皮に仕上げの磨きをかけて準備が出来たら、同幅の3枚の細長い片に切り、端と端とを革紐で縫い合わせると全体の長さはスクロールを必要とする人間の身長ほどの長さになる。これはつまり持ち主が全身悪魔たちから守られるということを意味するのである。その後、祈祷文や呪文、図像モチーフを描いていくのである。インクには、効果が一層増すように特殊な力をもつとされる植物の樹液や犠牲獣の血を混ぜ合わせる。

妊娠した女性や病人は、スクロールやその他の多様なお守りを絶えず身につけたり、傍に置いたりしておく。患者は良くなるまでそれらをしっかりと見つめ、深呼吸をし、祈り続ける。司祭がダブタラが訪ねてきたら、患者はスクロールを読んでもらい、聖水で祝福するように頼み、患者自身はその聖水を少し飲む。時にスクロールは家の中心となる場所から吊り下げられ、扉に面して配され、それにより悪魔が中に入ってこようと試みても剣を誇示している守護天使が見えると恐れをなして逃げていくように仕組まれる。

作品考1 景教僧文青磁壺 (資料21)



東アジアへ最初に伝えられたキリスト教は、ローマ帝国から異端として追放されたネストリウス派の教で、ペルシャで発展し、やがて635年に唐(中国)に及んだ。唐では景教とよばれたが、その教勢は、1625年に陝西省西安で発見された「大秦景教流行中国碑」(当博物館第1展示室に拓本を展示)や、2006年に河南省洛陽で新たに発見された「大秦景教宣元至本経幢」で知ることができる。それぞれ建中2(781)年と大和3(829)年に建てられているが、両方ともに大秦寺(キリスト教会)の僧景浄が当時の教主阿羅訶(ヤハウエカ)の命で述している。景浄は洗礼名をアダムという聖職者であるが、阿羅訶・景浄をはじめとする景教僧の姿を示す遺品は知られていない。

浙江省越州窯系窯産の青磁壺である本例には、貼花(メダリオン)技法によって、胴部の四面に景教僧の像が貼り付けられている。景教関係の図像は、河北省房山の「十字景教石刻」や2006年河南省洛陽出土の「大秦景教宣元至本経幢」などわずかしがなく、景教僧の姿はこれまで未知であった。したがって本例は景教僧の像および衣服を知りうる最古の資料となる。景教僧にはその姓から康国(サマルカンド)人や米国(サマルカンドの東南)人などシルクロード諸国のいわゆる胡人が多いことがわかっているが、本例にも太い眉に高い鼻、特徴的な髭から西域人の特徴を備えた人物像が貼付されている。その服装をみると、大きな頭巾をかぶり、緩やかな丸襟と袖が特徴的で、僧服の腰を結んだ紐を前に垂らしている。

ヨーロッパにも景教流行期の僧服のわかる画像資料はあまりないが、腰の前に紐を垂れ下げている点を含め、13世紀前期に創設されたフランチェスコ会の僧服に通じるものがある。景教は唐代の845年に行われた仏教禁圧に連動して教勢が衰退したが、元代に再興し、元とともに再び衰微している。再興期がフランチェスコ会の創設期に相当することや、南宋以降の越州窯における青磁生産の衰退を考えれば、13世紀頃、すなわち越州窯末期の作例とみられる。このように、本資料は13世紀頃の景教僧の衣服を知ることのできる、唯一の貴重な価値をもつ資料である。

(高倉 洋彰)

作品考2

アルベルト・ダ・カステッロ著『栄光なる聖母マリアのロザリオ』(資料ナンバー19)

数珠を繰りながら所定回数的主祷文(パーテル・ノステル)と天使祝詞(アヴェ・マリア)を唱え、同時に聖母マリアやキリストの生涯について瞑想を行なうことで、魂の救いと贖宥とを得る、いわゆるロザリオの信心は、15世紀後半以降のヨーロッパ全土において大流行し、さらに宣教師たちを通じて世界中に伝播していった。その中で重要な役割を果たしたのが、同時期に開発され普及した活版印刷による比較的安価な祈祷書であった。本書は、イタリア語で書かれた最初のロザリオ手引書である。1521年にヴェネツィアで出版されると多大な人気を博し、その後、知られているだけでも17回にわたり再版された(1522年、24年、34年、39年、45年、48年、56年、59年、61年、64年、66年、67年、69年、85年、91年、1603年、1613年)。本書が「イタリアにおけるロザリオ喧伝のための主要な手段」であったとされる所以である¹。

著者アルベルト・ダ・カステッロ(ディ・カステッロあるいはカステッラーノとも)は、15世半ばにヴェネツィアのカステッロ地区に生まれ(通称はこの出身地区に由来)、同地のサンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ修道院の副院長を務めたドメニコ会修道士で、出版活動に積極的に関わったことで知られている²。周知のようにドメニコ会は、一般信徒の宗教組織である「同信会(コンフラテルニタ)」の設立を通じて、ロザリオ信心の普及にあたって中心的な役割を果たした修道会であるが、1480年、イタリアで最初のロザリオ同信会が創設されたのが、アルベルトの出身地区に位置するヴェネツィアのサン・ドメニコ・ディ・カステッロ修道院においてであったという事実には、単なる偶然の一致以上のものを見る必要があるだろう。

イタリア俗語によるテキストに加え、デュオデシモ(12折判あるいは四六判)という本書のハンディなサイズも、教会のラテン語による大型典礼書とは異なり、家庭での礼拝や旅先への携帯など、一般信徒の私的な次元での使用に適したものである。この本の元来の所有者については詳らかでないが、幸い、その推測を可能にする手がかりが残されている。ヴェラム装による表紙および見返しに、インクでドイツ語の文章と1561年という年号(おそらくは購入された年)が記されているのである(p.21写真①,②)。その精確な判読は今後の課題であるが、これらドイツ語の文章と、見返しに記入されたローマという地名は、この書が当時われわれの想像以上に広く流通していた可能性を示唆している。ちなみに、ギンズブルグの名著『チーズとうじ虫』の主人公、フリウリ地方の粉挽屋メノッキオも、本書と思われる書物を、ピエモンテ地方のアルバに住む知人の女性から借りて持ってい

地方のアルバに住む知人の女性から借りて持っていたことが分かっている³。年齢や性別、社会階層や国籍を問わず誰でも参加できるのが、ロザリオとその同信会の重要な特徴であったが、このことは本書の幅広い流通範囲と読者層からも理解できるだろう。そして、俗人が瞑想を行なうにあたって重要であったのが、本書の最も特徴的な要素、すなわち約200点を数える木版による美しい図版の数々なのである。

装飾豊かな表題紙(1r, p.21写真③)をめくってまず見出されるのは、当時の出版物に義務づけられていた出版認可状で、ヴェネツィア総主教アントニオ・コンタリーニによるもの(1v-2v)と、異端審問官の修道士フランチェスコ・ピザーノ・ヴェネトによるもの(3r)が掲載されている。次に、ロザリオの崇拜とその歴史の概要が、「聖母マリアのロザリオの序文的書簡」(3v-9r)と「聖ドミニクスが創始したロザリオの起源」(9v-13r)において論じられる。信者であれば誰もがロザリオの祈りに参加できることが「聖母のロザリオへの無料参加」(13v-14r)で述べられた後、この信心がローマ教会によって公認されたものであることが、「教皇特使[フォルリ司教アレッシンドロ]によるロザリオの認可」(14v-16r)および「教皇シクストゥス4世によるロザリオの認可」(16v-18r)で論じられる。さらに、ロザリオ同信会への入会方法と諸規則、数珠を使用するにあたっての祝福の仕方、ロザリオ祈祷における瞑想の重要性、その結果得られる贖宥などについて、より実践的な視点から述べられている(「ロザリオ同信会の会則と規約」[18v-22r]、「ロザリオの贖宥」[22v-29r]、「ロザリオを唱えながら何を瞑想すべきか」[29v-31r]、「ロザリオ同信会への入会の仕方」[31v-32r]、「主祷文のロザリオへの祝福」[32v-33r])。

このような導入を経た上で、ロザリオ祈祷において最も重要な要素であり本書のメインテーマでもある、瞑想の具体的な方法について、詳細な説明がなされている。著者によれば、ロザリオを唱えるにあたって、信者は15の「玄義(misterio)」について瞑想をしなければならないが、このいわゆる「ロザリオの15玄義」は、聖母マリアとキリストの生涯にまつわる「歓びの玄義」、「苦しみの玄義」、「栄光の玄義」という3つのグループに分けられる。「歓びの玄義」は、①受胎告知、②聖母のエリザベツ訪問、③キリスト降誕、④キリストの神殿奉獻、⑤博士たちと議論しているキリストの発見、という5つのエピソードからなる、主にイエスの幼年時代に関わるものである(33v-89r)。これに続く「苦しみの玄義」は、イエスの受難の主要なエピソードである①園での祈り、②鞭打ち、③茨の戴冠、④カルヴァリオへの道行、⑤磔刑、の5つより

構成される(89v-145r)。最後の「栄光の玄義」は、①キリストの復活、②昇天、③聖霊降臨、④聖母マリアの昇天、⑤神と諸聖人の栄光、の5つからなる、イエスとマリアの死後の栄光とキリスト教の最終的な勝利に関わるものである(145v-201r)。各グループの冒頭には、薔薇の花をかたどったイメージが位置し(p.21写真④)、そこでは聖母を中心に5つの玄義が花卉の中に描かれ、さらにはそれらが数珠によって結びつけられている。これらの薔薇——ロザリオとは本来、薔薇(rosa)で編んだ花冠を意味する——のイメージは、読者がこれから行なうべき瞑想を視覚的に要約しているのである。

さらに、これらの各玄義は、より詳細な10のエピソードに分けられる。それぞれのエピソードは、見開きの左頁において木版画によって図解され、それに向かい合う右頁の文章において、その場面の道徳的な意義について詳しい説明が加えられる(p.21写真⑤)。このように、数珠とページを繰る読者は、ひとつの玄義ごとに10ずつ、計150のエピソードについて、イメージを眺めテキストを読みながら、心の中で瞑想するのである。各エピソードに関する説明文は、いずれも「信心深い魂よ、ここでは〜について観想しなさい(Contempla qui anima divota [fedele]...)」という文章で始まり、著者は二人称で呼びかけながら読者を瞑想へといざなっている。

さらに、各玄義をなす10のエピソードの冒頭には、その玄義の意味についての一般的な解説が位置している。読者はまず、主祷文を1回唱えて、この解説を読みつつその意義を観想し、続いて、天使祝詞を1回唱えては、各エピソードについて瞑想することを求められている。したがって、各玄義について主祷文1回と天使祝詞10回とそれに伴う11回の瞑想、15玄義全体では、15回的主祷文と150回の天使祝詞を唱え、165回の瞑想を繰り返すことになるのである。これらすべてを1日で行なうことは困難であるため、著者は、全体を3部に分けて、3日間ですべてを唱え瞑想することを推奨している。

本書の根幹をなす瞑想法については以上のごとくであるが、これに続く文章についても簡単に見ておこう。「同信会に入会するにあたっての忠告」(201v-203r)、「主祷文についての概説」(203v-215r)、「天使祝詞についての概説」(215v-218v)が掲載されているが、より多くの紙面を占めるのが、これらに続く「ロザリオの力により生じた驚くべき奇跡の数々」(219r-252v)である。これは、ヨーロッパ各地で報告されているロザリオの奇跡について記したもので、ロザリオ祈祷から得られたさまざまな「ご利益」を読者に紹介する

ことで、より熱心な信仰をプロモートする狙いがあったと思われる。

続いて「霊操の目次」(253r-255v)が付されるが、ここで興味深いのは、この書が「霊操(Essercitio spirituale)」の名でよばれていることである(同様の別称はc. 3vにおいてすでに登場している)。これは言うまでもなく、イグナティウス・デ・ロヨラによる心霊修行の手引書、『霊操(Los Ejercicia espirituales)』(1522年)と同じタイトルである。宗教改革勃発直後のほぼ同じ時期に執筆されたこれら2書は、「想像力を使って、観想(黙想)しようとする出来事の現場に身を置く⁴」ことを重視する中世以来のカトリックの伝統的な視覚的瞑想法を、近世へと発展的に継承した点でも、同様に重要な役割を果たしたといえるだろう。

最後の奥付(256r, p.21写真⑥)には、「ピエトロ・ラヴァーニの相続人(heredi)と共同経営者たち(compagni)」という版元名、および1556年11月という発行月が記載されている。ピエトロ・ラヴァーニ(デイ・ラヴァーニあるいはディ・ラヴァーニとも)は、ブレッシャ生まれの出版業者で、16世紀初めのヴェネツィアで主に活動した⁵。ピエトロが初版で使用した版木は、1625年に改訂されるまで⁶、ほとんど手を加えることなくそのまま用いられている。

(松原 知生)

¹ G. G. Meerssemann, O.P., "Le origini della confraternita del Rosario e della sua iconografia in Italia" (1963-64), ora in Id., *Ordo Fraternitatis: confraternite e pietà dei laici nel Medioevo*, vol. III, Roma 1977, pp. 1170-1232 (qui pp. 1182, 1204). 他方、下記の事典は、16世紀だけでも少なくとも18回再版されたとしているが、年は明記されていない。A. Duval, "Rosaire", in *Dictionnaire de Spiritualité*[...], vol. XIII, Paris 1988, pp. 938-980 (ici p. 954g.).

² M. Palma, "Castellano (da Castello), Alberto", in *Dizionario biografico degli Italiani*, vol. XXI, Roma 1978, pp. 642-644.

³ ギンズブルグ『チーズとうじ虫——16世紀一粉挽屋の世界像』杉山光信訳、みすず書房、1984年、81、83、90頁。

⁴ イグナティオ・デ・ロヨラ『霊操』門脇佳吉訳・解説、岩波文庫、1995年、100頁。

⁵ S. Curi Nicolardi, *Una società tipografico-editoriale a Venezia nel secolo XVI: Melchiorre Sessa e Pietro di Ravani, 1516-1525*, Firenze 1984.

⁶ *Rosario della Gloriosa Vergine Maria di nuovo stampato, con nuove e belle Figure adornato*, In Venetia appresso Lucio Spineda, 1625.

謝辞・企画編集後記

本特別展は2006年5月に当館が開館して以来、少しずつ収集してきた資料を皆様にお披露目する機会として企画いたしました。展示にあたり、非西欧圏のキリスト教文化という大きな括りはあるものの幅広い時代と地域の資料を扱うため、狭い展示スペースに情報量を詰め込みすぎたのではないかという懸念もあります。しかし、長い歴史と全世界的な広がりを持つキリスト教をひとつの切り口として歴史や世界を見渡すと、個別に見るだけでは一見現在のわたしたちと無関係に思われる資料でも直接・間接につながってくる連関性が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。そうしたなんらかの連関を感じながら改めて実際の資料をご覧いただくことで、美術として見たら「あまり上手ではない」資料や「なんだか字が一杯」の資料が、さまざまな興味の取っ掛かりを備えた魅力ある資料になっていくことを願っております。

さて、本特別展を行うにあたり、福岡アジア美術館学芸員・五十嵐理奈氏と中尾智路氏、國學院非常勤講師・金沢百枝氏、東京文化財研究所特別研究員・鈴木環氏、西南学院大学教授・須藤伊知郎氏、同准教授・松原知生氏にはとくに多大なるご助言・ご協力をいただきました。ここに改めて心より篤く御礼を申し上げます。

2008年10月

西南学院大学博物館学芸員 米倉 立子

西南学院大学博物館 2008年秋季特別展

『^{ボーダー}境界は出会いの場

非西欧圏のキリスト教文化

西南学院大学博物館新収蔵品展』図録

印刷・発行 2008年10月

編集者 米倉 立子

発行者 西南学院大学博物館
〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13-1
電話 092-823-4785

印刷所 凸版印刷株式会社